Web版 幼児教育史学会 会報 第 40 号

目　次

第21回大会案内
　第 21 回大会へのご案内‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥小玉 亮子
　大会開催要項
会員研究情報‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥内田 将平・駒 久美子・
　　藤崎 亜由子・河合 隆平
入退会･会員異動 / 寄贈図書
事務局からのお知らせ

第21回大会へのご案内

第21回大会は、2025年12月13日（土）に、お茶の水女子大学国際交流留学生プラザで開催します。皆様のご参加をお待ちしています。

今度の大会のシンポジウムは、「レッジョ・エミリアの幼児教育の歴史と女性たち」というテーマです。レッジョ・エミリアの幼児教育の歴史のDVDを作成されたドイツのお二人の研究者をお招きして議論をしたいと思います。ドイツからはオンラインで繋ぎ、会場では、オンラインと対面のハイフレックスでシンポジウムを開催いたします。今年は、お茶の水女子大学の創立150周年にあたることもあり、このシンポジウムは、お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所との共催で実施することになりました。ですので、このシンポジウムの参加については、オンライン参加は一般公開とさせていただきたいと思います。

さらに、今回は関連企画を二つご用意しています。一つは、大会前日に行う、来年度に創立150周年を迎えるお茶の水女子大学附属幼稚園の施設見学です。午後、園児たちが帰った後、幼稚園の園舎と園庭の見学をします。会員を対象として、別途、事前申込を受け付けますので、関心のある方はご参加ください。

二つ目の関連企画として、大会の翌日に、いつものように愉フォロ会を開催いたします。愉フォロ会の詳しい内容については、近くなりましたらご案内いたします。大会にも関連企画にも、ぜひ、奮ってご参加ください。

大会や関連企画へのご参加については事前申込フォームを設ける予定です。附属幼稚園の施設見学と、シンポジウムへのオンライン参加については、必ず事前申込をお願いいたします。大会への対面参加と愉フォロ会への参加は、いつものように、当日参加もできますが、事前申込にご協力いただけますと幸いです。このように参加申し込みが若干複雑になりますが、近くなりましたら、詳細をご連絡いたします。もちろん、自由研究発表も募集しております。ぜひ、この機会に積極的にご発表して下さいますようお願いしいたします。

お茶の水女子大学は、地下鉄の茗荷谷駅でも護国寺駅でも、どちらからでもアクセスできますが、今回の会場である国際交流留学生プラザは大学正門右手に隣接していますので、茗荷谷駅の方がより近く、駅（1番出口）を出て左手方向にまっすぐ徒歩7、8分程度で着きますので便利です。

では、皆様のお越しをお待ちしています。

第21回大会実行委員長 小玉 亮子
（お茶の水女子大学）

幼児教育史学会第21回大会 開催要項

1. 期日：
大会　2025年12月13日（土）
大会前日　12月12日（金）
関連企画1　附属幼稚園施設見学
大会翌日　12月14日（日）
関連企画2　愉フォロ会

2. 会場：
お茶の水女子大学
国際交流留学生プラザ2階　多目的ホール
東京都文京区大塚2-1-1

3. 大会日程：
12月12日（金）関連企画1　附属幼稚園施設見学
14:30-14:50 受付（国際交流留学生プラザ2階）
15:00-17:00 お茶の水女子大学附属幼稚園
施設見学
*会員限定、**事前申込必須**

12月13日（土）大会
8:30- 9:00　受付（国際交流留学生プラザ2階）
9:00-13:00　個人研究発表
13:00-14:00　昼食*
14:00-15:00　総会
15:30-17:30　シンポジウム★
18:00-20:00　懇親会※

★シンポジウムに**オンラインで参加する方は、事前申込必須**です。

＊昼食時、プラザ1階のカフェは混雑が予想されるため、あらかじめ昼食をお持ちいただくことをおすすめします。なお、茗荷谷駅1階にベーカリーカフェ、駅から正門までの間にコンビニエンスストアが数店あります。

※懇親会は大会会場と同じ2階にあるラウンジで行います。

12 月 14 日（日）関連企画 2　愉フォロ会
9:00- 9:30　受付
（国際交流留学生プラザ 3 階セミナー室）
9:30-12:00　愉フォロ会

4. シンポジウム
テーマ：レッジョ・エミリアの幼児教育の歴史と女性たち
講演者：　Sabine Lingenauber（Hochschule Fulda）
Janina von Niebelschütz（Hochschule Fulda）
指定討論者：小玉 亮子（お茶の水女子大学）
司会者：　一見 真理子（お茶の水女子大学）

（趣旨）
レッジョチルドレンで開催されている幼児教育に関する研修に参加されたことのある方はご存知かと思いますが、そこでは、最初に、戦時下のファシズムに対するレジスタンスの経験と、戦後の復興の中で市民たちがいかに立ち上がってきたのか、そしてレッジョの基本が民主主義であることが語られます。戦後80年を迎えた今年、戦争と民主主義に焦点を当てて、幼児教育を考えるシンポジウムを開催したいと思います。

シンポジウムでは、戦時下にレジスタンスとして活動し、戦後レッジョ・エミリアの幼児学校をつくった女性たちについて、動画を作成されたドイツのお二人の研究者をお招きします。ドイツのフルダ大学教授のSabine Lingenauber氏と共同研究者のJanina von Niebelschütz氏です。お二人は、レッジョ・エミリアの幼児学校を作ることに貢献されてきた女性たちのインタビューをまとめたDVD *The Women and the Schools of Reggio Emilia* を作成され、それに関連するサイトを立ち上げておられます。

DVDの一部がYouTubeで公開*されていますので、ご関心のある方はぜひ事前にご覧いただければ、と思います。

当日のシンポジウムでは、この動画を作られた経緯、どのような研究組織/ネットワークで作成したのか、DVDへの反響、その後の活動、作成から現在に至る困難や課題等をお聞きしたいと思っています。そして何より、このDVDで、多くの女性たちに焦点を当てた背景をお聞かせいただきたいと思っています。

日本における幼児教育史研究は、これまで主として文字を通じてその成果が公表されてきました。実際の声による証言や、動画による記録の持つ意義と課題を考えることで、これからの研究のあり方への示唆を得ることができれば、と考えています。（小玉 亮子）

*https://youtu.be/ivLAQ_kbNB8?si=99afwxQug2SYfDgt（2025/06/15閲覧）

5. 大会参加費
会員・非会員ともに 1,000 円
学部学生・大学院生は無料
シンポジウムのみにオンライン参加の場合は無料

6. 懇親会
大会会場と同じ2階にあるラウンジで行います。
参加費は、会員・非会員、学部学生・大学院生ともに 4,000 円です。

7. 研究発表の申し込み _
① 申し込み方法
第21回大会の研究発表申込書は、学会HPからダウンロードしてください。9月８日（ 月 ）までに記入済みの「研究発表申込書」を電子メールに添付して学会事務局へお送り下さい。
・宛先：admin@youjikyoikushi.org

数日内に到着メールを送信します。

② 発表資格

既会員：申し込み時に年会費を納入済みのこと。
新入会員：申し込み時までに入会手続きを終え、年会費を納入済みのこと。

③ 発表時間

１人（１グループ）あたり30分（質疑応答5分を含む）を予定していますが、変更する可能性もあることをご了解ください。

④ 発表受付手順

学会事務局で申し込みを受領した後、理事会にて発表内容を検討します。その結果、発表調整のため、個別に連絡を差し上げる場合があります。

＜大会に関する問い合わせ先＞
幼児教育史学会 第21回大会実行委員長
小玉 亮子
お茶の水女子大学 小玉亮子研究室内
E-mail：ochadai.youjikyoikushi@gmail.com

会員研究情報

戦争と幼児教育 － アウシュヴィッツ解放 80 年に寄せて

内田 将平（桜花学園大学）

「私たちは人間性すべてを奪い取られた」
レオン・ヴァイントラオプ

１．序

第二次世界大戦でナチス・ドイツによるユダヤ人大虐殺（ホロコースト）があったポーランドのアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所が解放され、2025 年 1 月 27 日で 80 年となった。一つの節目の年となる現在においても、世界に目を向けてみれば、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻や、イスラエル・パレスチナの紛争などで、子どもを含む多くの市民が犠牲となり、また多くの住民が国外への退避を余儀なくされている。こうした中で、教育学、そして幼児教育史を研究するわれわれに何ができるのか、あるいは、どのように応答する責任があるのかを再考することは非常に重要である。そこで本稿では、ナチス・ドイツ時代に、ユダヤ人のための幼稚園教諭を養成する学校を設立し、子どもたちの救済活動にも尽力したユダヤ人女性連盟(*Jüdischer Frauenbund, JFB*)の思想や実践などを紹介する。

２．アウシュヴィッツの子どもたち

残念ながら、強制収容所での子どもたちに関する統計や正確な数字はなく、その報告は比較的少ない。また生き残った子どもの数もごくわずかである。しかし、強制収容所では多くの子どもたちが確かに存在していた。イタリアの作家プリーモ・レーヴィ（*Primo Levi*, 1919-1987）は主著『休戦』のなかで、ある幼児を説明した場面を次のように表象的に描いている。「フルビネクは虚無であり、死の子供、アウシュヴィッツの子供であった。(…中略…) 彼は息を引き取るまで、人間の世界への入場を果たそうと、大人のように戦った。」（レーヴィ 2010）。アウシュヴィッツ解放 80 年の追悼式典で演説した生存者の一人ヴァイントラオプ氏は、当時の自身が置かれた状況を本稿エピグラフで引用したように述べている。実際に、強制収容所に連行された多くの子どもたちは、労働力として不要と判断されると直ちにガス室に送られ殺害されるか、あるいは、医学的とは言い難い放射線実験や形態学検査といった人体実験の対象とされ、深刻な健康被害を受けながら命を落とすという、筆舌に尽くしがたい極めて過酷かつ非人道的な状況に置かれていた。こうした状況は、子どもたちの「人間性」を根底から剝奪するものであったと言える。

３．人間性を回復し、声を与えること

ナチス・ドイツは早い段階から、ユダヤ人を排除する法律や条例を制定し、彼らの市民的権利や職業的自由を徐々に奪っていったことは周知の事実である。こうした差別政策の結果、公的な教育機関での保育職に就くことが困難となったユダヤ人の間では、子どもの発達や生活を支えるために、独自に幼稚園教諭を養成することが強く求められるようになった。しかし、教育機関で専門的訓練を受けたユダヤ人の幼稚園教諭は極めて少なく、人材の確保が喫緊の課題となっていた（Mosse 1934；Wolff 1935）。このような状況に対処すべく、ユダヤ人女性連盟などが中心となり、幼稚園教諭を養成する独自の教育機関が設立されたのである。その一つである「ヴォルフ・セミナー（*Wolff-Seminar*）」では、若い女性が幼稚園や児童養護施設などで働くことができるように、教育学や心理学といった基礎科目はもちろんのこと、音楽、手工芸、描画、裁縫などの専門的な実技科目もカリキュラムに含まれていた。さらに、幼稚園や学童保育などでの実習を通して、徹底的な教育的および技術的訓練が実施されていた(o.V. 1934)。こうした連盟の動因の一つに、連盟の中心的人物であったハンナ・カルミンスキー

（*Hannah Karminski*, 1897-1943）の存在がある。彼女は、あえて亡命という選択肢を取らずにナチス・ドイツに留まり、そこに残されたユダヤ人の女性や子どもたちを救うために、連盟のニュースレター編集長まで務めた女性運動家である。彼女の思想を読み解くと、その根底には「日常と人間性」を尊ぶ想いが見てとれる。そもそも「称賛されるようなことなど何ひとつしていません」と、ユダヤ人を助けることを自身の「道徳的義務」と見なしていたカルミンスキーは、1941 年 11 月に妹のエルナに、「あなたもよくご存知でしょうが、日々のささやかなことよりも、大きな要求の方がかえって果たしやすいのです。ナチスによって迫害を受ける厳しい状況にあって、それに相応しいふるまいが求められる私たちにも、日常や人間性はあるはずです。」(Karminski 1941) と、手紙を書き残している。つまり、困難な時代においては「大きな理念や革命」よりも「人間が人間らしく日常を生きること」の方がはるかに難しいと述べているのである。だからこそ、「今日の女性運動を担うのは、もはや開拓者の集団ではなく、日常の中で生きている普通の女性たちである。」(Karminski 1929)として、女性や子どもに関心がある多くの人たちの協力を得ながら、子どもが自分らしく生きることができるという「当たり前にあるはずの」教育環境を整えていったのである。

このように、ナチス・ドイツ時代にユダヤ人の幼稚園教諭が独自の教育機関で養成されていたという事実は、ドイツにおけるソーシャルワークの歴史においてあまり知られていない側面であることからも、今後の更なる実証的研究が望まれるだろう(Berger 2022)。

４．結 - 無力感の先にある「祈りとしての教育」

教育という営みは、必ずしも戦争を直ちに終結させ、平和を実現するための特効薬ではない。しかし、先に述べたように、教育は戦禍の中で生きる子どもたちに対して決して「無力」とは言い切れない。むしろ教育の根底には、「平穏な日常を希求する力」が宿っている。だからこそ、戦時下においてこそ教育の本質的な意義が問われるのではないだろうか。

本原稿の依頼を受けた 2025 年 3 月、私はドイツに研究滞在していた。ドイツでは市街を歩くと、時折、ナチス・ドイツの犠牲者を弔う「つまずきの石(*Stolperstein*)」が路地に埋め込まれているのを目にすることがある。本稿が、その記念碑のように、幼児教育史研究の再考と対話を促すささやかな契機となることを願って、結びとしたい。

引用文献

・Berger, M. (2022). Die Schülerinnen stellten eine interessante und in sozialer Hinsicht wertvolle Mischung dar. Zur Ausbildung jüdischer Kindergärtnerinnen in den Jahren 1934–1942. In: *Sozial Extra*, Vol.46, S. 308-313.

・Karminski, H. (1929). Internationale jüdische Frauenarbeit. In: *Monatsschrift der Juden in Deutschland*, Vol. 5. Heft 3, S. 280-287.

・Karminski, H. (1941). Aus den letzten Briefen von Hannah Karminski an ihre Schwester. In: *Hannah Karminski Collection AR330,* Leo Baeck Institute; New York. S.37.

・レーヴィ，プリーモ（竹山博英訳）（2010[1963]）『休戦』岩波文庫, p. 32ff.

・Mosse, M. (1934). Sorgt für das Kleinkind. In: *Blätter des Jüdischen Frauenbundes für Frauenarbeit und Frauenbewegung*, Jüdischer Frauenbund von Deutschland. Vol.7, S. 2.

・o.V. (1934). Aus dem neuen Kindergärtnerinnen-Seminar. In: *Central Verein Zeitung*, vol.26, S. 15.

・Wolff, L. (1935). Die Kindergärtnerin und Hortnerin. In: *Blätter des Jüdischen Frauenbundes für Frauenarbeit und Frauenbewegung*, Jüdischer Frauenbund von Deutschland. Vol.3, S. 6.

実践すること･研究すること･養成すること

駒 久美子（千葉大学）

私が大切にしているライフワークは 3 つある。「実践すること」「研究すること」「養成すること」である。このうち，「実践すること」と「研究すること」の往還によって，博士論文を執筆した。博士論文では，幼児の創造的な音楽活動に関する研究を「即興」と「応答」に焦点をあて研究を実施しており，このとき着目した「即興」と「応答」が，現在の「養成すること」においても生きている。

１．実践すること

実践に重きを置いているのは，音楽大学卒業後，中学･高等学校の音楽科担当教員になったことに由来するかもしれない。中学生の授業では，表現することを恥ずかしがる傾向が多く，もっと生徒たちが自由に表現できるような音楽表現の授業を…と教材研究に試行錯誤していたときに，音楽教育雑誌に授業実践例を提供する機会に恵まれた。授業観察に来てくださった大学の先生とやりとりしながら，研究授業を組み立て，事前研を実施したり，カンファレンスを実施したりして，音楽教育雑誌には自分なりに省察した所感を執筆した。音楽大学のピアノ科出身であった私は，卒業演奏が最終課題であり，卒業論文は執筆していなかった。さらに私立校に勤務していたため，公立の先生方のように授業研究をする横の繋がりもなかった。そのため，研究授業のために大学の先生とやりとりしたり，参観者とカンファレンスをしたりすることはとても新鮮で，研究って面白い！と思った瞬間であった。

当時，私は児童合唱団の代表としても活動していた。児童合唱団では，子どもたちが次々と新しい歌を覚えていく様子を目の当たりにし，子どもは何を手がかりに歌を覚えていくのだろうか，と疑問を抱いた。これが 2000 年代初めに大学院へ進学する契機となり，修士論文の「問い」になった。そしてこの「問い」は私にとって，子どもを「みる」という観察者の視点を育てる契機となった。修士課程では，子どもとの関わりは実験的な関わりであったため，博士課程では，より子どもを「みる」ことができる実践的な研究に取り組みたいと考えた。それが冒頭に述べた「即興」と「応答」に焦点をあてる契機となっていく。2000 年代後半のことである。ここで私自身が実践者のひとりとなり，子どもに「応答」するためには，子どもを「みる」だけでなく，子どもを「きく」ことがより重要になることに気付いていく。子どもを「きく」というのは，日本語として不自然かもしれないが，子どものつくりだす音，子どもの発する声，子どもの音にならない音，こうした子どもの表現に寄り添い，応答すること，しかもこれらの子どもの表現に寄り添うためには，即興的に応答する必要があることから，自分自身の音楽の専門性を軸足として，保育実践に深くかかわりながら，子どもを「みる」「きく」という，実践しながら研究するスタイルが確立されていった。

２．研究すること

こうして，子どもを「みる」「きく」ことによって，研究を推進していったのだが，研究を進めるにつれ 2010 年代後半頃より，多様なニーズを持つすべての子どもの表現を支えるために，保育者養成課程における表現教育においても，インクルーシブの観点から学びを深めていく必要性があると思い至った。実際に保育現場から求められる力は，総合的に指導する実践力であり，架け橋プログラムからも，すべての子どものために格差のない質の高い学びの基盤づくりが推進されている。いつでも，どこでも，誰とでも表現活動を展開するための手だてのひとつとして，これまで着目してきた「即興」は型にとらわれず，また特定の言語に依拠せず，多様性が尊重され，それ自体が創造的な活動であり，かつ多様なニーズや背景を持つすべての子どもにとって等しく開かれた表現方法であるといえる。そのため，現在の研究においては，子どもを「みる」「きく」だけではなく，その子どもを支える保育者となる養成校の学生を対象として，インクルーシブな視点から表現教育を検討する研究へと広がっていった。

こうした研究の広がりとともに，研究成果の公表機会についても積極的に広げていった。博士課程在籍中は，中学・高等学校の音楽科教員のほか，保育者養成の大学にて非常勤講師として勤務していたが，それ以外の時間は全て実践と研究の往還に費やしていた。その研究成果は，指導教員の勧めにより，国内外問わず学会発表したり，論文投稿したりしていた。英語は全然得意でないのに国際学会で発表したり，英語で論文を執筆したり，全く「怖いもの知らず」である。しかしその経験がいまなお生きて，国際学会にて発表することも，私のライフワークのひとつとなった。

写真は 2018 年の OMEP（於：プラハ）にて口頭発表した際のものである。この年以降，新型コロナウィルス感染症の蔓延によって，国際学会も中止となったり，延期となったりしたが，昨年（2024 年）は久しぶりに国際学会（ソウル）に参加しポスター発表，今年（2025 年）はオーストラリアのパースにて，「誰一人取り残さない学びを保障する音楽授業とはー特別支援学校小学部における即興的音楽対話のプロセスー」（和訳）というタイトルでポスター発表を予定（7 月）している。

３．養成すること

すでに述べた通り，現在の研究では保育者養成における即興表現を活かしたインクルーシブな表現教育プログラムを開発・検証することを中心としており，研究成果を養成に還元すべく研究を進めている。ICT や生成 AI も積極的に活用する一方，自身の体で感じる経験をもとに表現の引き出しを豊かにすべく，体の諸感覚に意識を向け，多感覚で感じたり表現したりできるような即興による教材を開発・検証している。学生自身も実践してみることによって，初めて「わかる」ことに気づいており，振り返りコメントの分析からも多感覚で感じて表現しようとしていることが読み取れる。こうした学生の気づきから改めて感じるのは，養成課程における表現教育において，「何を学ぶか」はもちろん重要であるが，「なぜ学ぶのか」を問い，学生自身の表現観・音楽観を醸成する必要性である。今後はこうした学生自身の表現観・音楽観の醸成についても研究を広げていきたい。

幼児教育における自然との関わり：虫との出会いに注目して

藤崎 亜由子（奈良教育大学）

この度は、会報にて研究をご紹介する機会をいただきましたことを心より感謝申し上げます。私は、発達心理学が専門で、奈良女子大学附属幼稚園をフィールドとして学生時代から子どもたちと生きも

のとの関わりをテーマとして観察調査を行ってきました（現在は、奈良国立大学機構として同一法人内の附属園２園、奈良女子大学附属幼稚園と奈良教育大学附属幼保連携型認定こども園にお世話になっています）。当初、ウサギやカメ、キンギョなどの飼育動物との関わりを調べていましたが、それ以上に子どもたちが日々関わっているのは虫（昆虫を含めて、地を這う小さな生きものの総称です）だということに気づき、虫をめぐる子どもたちの活動に興味をもって研究を行ってきました。

保育の場における虫の存在の面白さには、いくつかのポイントがあります。１つ目は、生存戦略のユニークさです。変態、擬態、生命サイクルの短さ（誕生から死までを短期間で観察できる）、他の生物との共生関係など、生きものを知る教材としての魅力を備えています。２つ目は、虫は自然体験への入り口であるということです。虫はどんな都会でも出会える身近な生きものです。自然と関わる際には、必ずそこには虫がいます（蚊など、避けて通りたい虫も含めて）。虫は避けて通ることはできないからこそ、虫への嫌悪感を減らすことは、環境教育の推進のためにも重要な課題だと考えています。３つ目は、日本には世界的にみても独自に発展した豊かな虫文化があるということです。日本人は古くから身近な虫に独自の風情を見いだし心をよせてきました。詩歌や工芸品などにも多くの虫が詠まれ描かれてきました。蛍狩りや蝉取りなどは季節の風物詩です。虫捕り網をもった子どもの姿は、日本ならではの風景だと言えます。

そんな虫たちは、子どもたちにとってよい遊び相手です。実際に捕まえて手に取ることができることや、その数の多さが魅力となっています。フィールドとしてお世話になっている幼稚園は、奈良女子高等師範学校附属幼稚園として大正元年に保育を開始し、その当時の保育日誌や、写真などが現存しています*。以前に、昭和 13（1938）年度の年長組、合計 5 組の保育日誌を分析し、特に動物や植物の記載がある箇所を抜粋して考察を行いました（藤崎, 2014）。保育要目「観察」を中心とした豊富な記述によると、幼稚園では、蚕や兎、金魚などが常時飼育され、時には子どもが連れてきた栗鼠や各種虫（蛍、蝸牛など）が飼育されていました。

また、大正 13 年（1924）創刊の後援会機関誌「うなゐの園生」には、寄附兎舎と寄附禽舎の写真が掲載されており、「小禽舎設置」小鳥舎 1 個、小鳥 25 匹、鳩舎 1 個、兎舎 3 個、金魚水槽 2 個、白鼠箱 1 個、「植物栽培」植木鉢 250 個と記されています。翌年の後援会副会長の記述によると、具体的な動物種として鳥（鳩、インコ、文鳥、カナリア、ホホジロ、金バラ、セキセイインコ、銀バラ、紅雀、その他）、リス、小猿が飼育されていたとあり、小猿は「最も愛嬌があり一番子供達を嬉しがらせてゐる」と記載されていました。

園外保育も積極的に行われており、近接していた奈良女子高等師範学校の農園に苺狩りや芋掘りにでかけたり、果樹園や温室の植物、豚を見学したりしていました。また、奈良公園や田圃にはよく出かけ、虫とりや草摘みをしていました。奈良公園で虫捕り遊びをしている子どもたちの写真が図１です。当時も今も、子どもたちは同じように虫に興味をもっているのだと感じます。

図１　奈良公園での虫捕り（大正時代）

また園外保育では、時には「いいお天気だから」と急遽出かける自由さもありました。事例１には、お散歩にでかけた１日の記述をご紹介します（藤崎, 2014 に掲載）。バケツや網をもってお散歩にでかけ、ツバメの巣やヒヨコを観察しながら楽しそうに口ずさみ、オタマジャクシをすくい、カエルを追いかけている子ども達の様子が生き生きと書かれています。地域の人と交流する様子や、田んぼなどで虫捕り、カエル捕りができる環境など、これからも大切にしたい保育の姿があります。

事例 1.

二ノ組　　昭和 13 年 5 月 21 日（土）の園外保育

おたまじゃくし取りの罐や網がうれしくて手を離せない。半数の幼児は持参してゐなかったので、小さい筆洗ひのバケツに入れ合ふ事にして早速用意して出掛けた。佐保川に沿って法蓮の方に向ふ。途中、つばめの飛ぶのを観察。鳴く声を聴いて幼児は揃って歌を歌って喜んだ。百姓家の前で親鶏とひよこがピヨピヨ遊ぶ様を見て立寄って見る。ヒヨコの歌が又歌ひ出される。材木屋のお父さんが皮を剥いで白木にしてゐるのも面白く見る。豆、麥等観察しながら急いで田圃に出た。細い路を一列でよく気を付けながら進むともうおたまじゃくしがゐるといふので大喜びだ。想像した様に易く取れない。網に入って呉れないので不平顔であったが、だんだん上手になり、僕がすくへたとか、何匹とれたとか面白がって遊ぶ。三名が片足を水にはめて濡したが怪我はなかった。始め育英の裏辺りで取り、帰り途、〇〇ちゃん[児の名前]の路案内で、本校の西の田圃でも取った。蛙を取らうと努力してゐたが網が小さいので取れない様だった。十一時二十分頃帰園。帰宅準備をして、おたまじゃくしを観察し、罐を持参した幼児達は大事におたまじゃくしを入れて持帰った。

その他にも、「虫の触覚の話」をしたり、「自由に観察しカマキリの顔が三角だと笑つていた」ことや、「お帰りの時、とんぼが部屋に入ってきたので、とんぼの生長のお話をなし」など、虫という存在が偶発的な出会いの中で、今も昔も保育にいい刺激をもたらしてくれる存在であると感じることができます。

現在は、世界的にも虫の数が激減し、生物多様性の側面から学校現場での生きものの取り扱いについても変化が迫られている時代です。例えば、馴染みの深いアメリカザリガニも特定外来生物として、飼育が原則禁止されています（学校現場では終生飼養が求められています）。日本の保育現場では、自然との触れ合いや生きものの飼育の意義が十分に認識されている一方で、今日的状況を踏まえた実践展開は不十分だとも感じています。

現在勤務している奈良教育大学では、附属幼稚園が 2024 年度から国立大学初の認定こども園となりました。新たに教育・保育目標を作成し、「持続可能な社会づくりに貢献できる人材の育成」を掲げてESD にも取り組んでいます**。また、私自身も附属こども園と協同して「虫を主題とした保育カリキュラム構築と評価指標の開発」に取り組んでいます。まだ始まったばかりの取り組みですが、自然との関わりを大切にしてきた日本の保育の伝統に学びながら、新しい保育の在り方を模索していきたいと考えています。ご興味をお持ちいただけましたら、ぜひご意見やご助言をいただけますと幸いです。

*詳しくは HP にある保存資料一覧をご覧ください。
https://www.nara-wu.ac.jp/kindergarten/research.html
**詳しくは、https://c-child.nara-edu.ac.jp/

引用文献

藤崎亜由子（2014）昭和初期の幼稚園における自然・教育の実際. 奈良女子高等師範学校附属幼稚園（昭和 13 年度）年長組の保育日誌の分析から. 大阪成蹊短期大学研究紀要, 11, 83-102.

筋ジストロフィー児の生存と教育

河合 隆平（東京都立大学）

これまで養護学校義務制実施（1979）を画期とみて、重度障害児を包摂する「教育の仕組み」がいかに構築されてきたのかを検討してきた。その際、人が「生きる」ことの意味を問い直す「「生存」の歴史学」の動向（大門正克）を参照してきた。「生存」とは、人間の生きることに関する事象の総体をさすが、おもに「いのちや生活の質」に関わる側面を把握する言葉である。「生存」という根源的で主体的な視点を視点に据えたのは、障害児教育において教育も、医療も生活との接続は自明ではなく、両者の接続のされ方にも歴史性があり、その過程にこそ教育の固有性が生成・自覚化される契機が存在すると考えるからである。そのことを筋ジストロフィー児童（以下、筋ジス児）の教育と医療が交錯する現場に即して検証しようと作業を進めている。

1964 年 3 月に「全国進行性筋萎縮症児親の会」が結成され、治療法確立のための国立研究所の設置と施設・病院における療養生活の保障を求める運動が展開される。これを受けて厚生省は、一九六四年五月に「進行性筋萎縮症対策要綱」を策定し、国立療養所への収容が始まる。当時病院に筋ジス専門病床はなく、肢体不自由施設では入所を拒否され、学校教育も受けられない状況のなか、病態や原因の解明のための医科学研究と長期・生涯にわたる療養が課題とされた。

1964 年当時、筋ジス患者数は全国で約 5,000 名と推計され、その 70～80%が 16 歳未満とみられていた。それゆえ筋ジス対策では当初から医療と教育の両方が求められ、療養所では筋ジス児たちが教育によって生きがいをもつことが期待された。こうして各地の療養所内に養護学校が開設された。教育は遠い未来を描くことが難しいかれらの現在の生活それ自体を充実させることを志向した。とはいえ国立療養所は筋ジス児たちの生命維持で精一杯であり、子どもらしく育つ環境とは言い難かった。筋ジス児が残された時間を思うように生きられるようにと望んだ親たちは、療養所ではなく地域・在宅での支援を追求した。厚生省は医療資源が豊富な東京に専門病床は必要ないとして、筋ジス病床を医療資源に乏しい地域に回す方針であった。それゆえ、東京の筋ジス児の親たちは、地域・在宅生活を前提とした医療・福祉・教育を求め、巡回検診や宿泊検診などの自前の取り組みを通して点在する子どもや家族を結びつけた。そうしたなか東京都日野市では、住民参加により地域医療の仕組みを構築し、その一環に教育支援を位置づけた。

日野市では 1971 年 4 月に日野第一小学校、翌年 4 月日野市立七生中学校に不就学障害児のための「訪問学級」が開設された。中学校としては、府中市立第七中学校に次いで都内 2 校目の開設であり、七生中学校訪問学級に学ぶ筋ジス児たちの要求を受けて障害者の青年学級や訪問学級といった社会教育が相次いで整備された。不治の病を理由に教育から排除された筋ジス児にとって学ぶことは生きるために欠かせない自尊心と主体性を育むものであった。そして教育への包摂が社会的承認につながると認識したがゆえに、かれらは中学校卒業後も教育の機会を要求し続けた。

訪問学級の活動の様子は、訪問学級生たちによって詳細に記録され、学級文集『やあこんにちは』に掲載された。学級文集には訪問学級や本校の生徒、卒業生の作文のほか、保護者、教員、ボランティアの手記が掲載され、訪問学級生や保護者がその時々の心情を表現し交流する媒体となった。ある筋ジス症の男子生徒は「毎日がとても忙がしく、日が過ぎるのがとても早く感じられます。1 日 24 時間がた

りません。僕にとって訪問学級は生活の一部どころか、生活の中心になっているといっても過言ではありません」と綴っている（『やあこんにちは』第４集、1976 年）。このように文集には、筋ジス児たちが学校教育によって自らの病気と向き合い、生きる意味を見出そうとした、学ぶことと生きることの軌跡が刻まれている。医療職たちは在宅・地域医療の現場において、こうして教育によって育まれた筋ジス児たちの生きようとする意欲に応答する専門職倫理を発揮した。

一方、当時の市広報（『広報ひの』）では「健康な子どもを生むために」という記事が掲載され（第 414 号、1976 年 5 月）、「胎児、新生児、乳児期は、肉体的にも精神的にも傷つきやすく、一度細胞に傷がつくと治すことは非常に困難で」あり、「もっともっと小さな生命を大切にしなくてはならない」という呼びかけもなされていた（第 416 号、1976 年 6 月）。ちょうど日本は乳児死亡率の低減から先天性異常児の出生予防へという母子保健政策の質的転換期を迎えており、日野市における障害児の出生予防をめぐる動向も同時代の母子保健政策の影響を受けていたと考えられる。

目下、こうして筋ジス児の医療と教育の場が、学校・病院から地域・在宅へと変化する過程で、かれらの「生存」を阻害するものと支援するものが何であり、教育と医療が「生存」の論理と条件をいかに創出したのかを検討している。

なお、本研究を進めるにあたり、日野市立図書館に大変お世話になっている。各種統計や市議会会議録等はデジタル化されホームページ上で閲覧可能であり、利便性が高い。とくに市政図書室は小規模ながら、教育・福祉・医療の資料が丁寧に保存されており、地域史研究に欠かすことのできないアーカイブスである。保育・母子保健関係の資料も豊富であり、ぜひ足を運んでいただきたいと思う。

入退会･会員異動（**2025.2.24～2025.6.14**）

省略

寄贈図書（**2025.2～2025.6**）

なし

事務局からのお知らせ

1）会費納入のお願い

本学会の会計年度は、10 月 1 日から翌年の 9 月 30 日までです。振込用紙は、第 20 回大会年度 （2024 年 10 月 1 日～2025 年 9 月 30 日）とそれ以前の年度の会費が未納の方にお送りしております（2025 年 6 月 20 日確認）。

宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。シールの記載と振り込み用紙がない会員は完納状態にあります。 本状と行き違いでご納入の場合には、何卒ご容赦ください。

年会費： 一般会員 7,000 円　　特例会員（学生・退職者等）4,000 円
送金先： 郵便振替 00190-9-73668
加入者名： 幼児教育史学会

2）所属･住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、どうぞもれなくメールにて下記の学会事務局までお知らせください。

3）メールアドレス登録のお願い

イベントのお知らせなど、学会事務局からの連絡のために、送信専用のメーリングリストを作成する予定です。メールアドレスをご登録頂いていない方は、事務局までメールでアドレスをお知らせください。

****

幼児教育史学会会報 第 40 号 2025年 6 月25日

発行者 幼児教育史学会

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院教育学研究科 浅井 幸子研究室気付
幼児教育史学会事務局　E-mail: admin@youjikyoikushi.org　郵便振替 00190-9-73668

編集 楠 瑞希子　印刷 ㈱木元省美堂